古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(6)

安　藤　　充

キーワード：古ジャワ語、Sārasamuccaya、マハーバーラタ

本誌連載の前 5 編[1)]に続き、Sārasamuccaya 第201偈から第250偈に関して、本文でテキスト（サンスクリット偈と古ジャワ語解説）のローマ字転写、及びそれぞれの日本語訳を提示し、テキストの典拠やその異読に関する情報（新知見も含む）、翻訳や解釈に関わる問題点などを注記していく。

201.

nātaḥ paraṃ ca lokeṣu kiṃcit pāpiṣṭham asti vai /
yathātmanāśanaṃ loke nāsti dehīti vā punaḥ //[2)]
世の中で、これを上回る最悪なものはない。
「ない」、「与えよ」という、自らを滅ぼす言葉。

tan hana kĕta kapāpan lwih saṅkêriki / ikaṅ sumahurakĕnĕ nāsti / si mujarakĕnĕ dehi kunĕṅ / dehi maweweha kita / liṅ nikaṅ marâmintâgöṅ[3)] harĕp / nāsti / tan hana / sahur nikaṅ atĕṅĕt / pinintan / wĕkas niṅ kapāpan ika / ika taṅ makojar dehi / phalaśeṣa ni kapāpan iṅ sumahur nāsti ṅūni ika / mataṅnyan paḍa pāpa nika kāliḥ //
これよりもひどい悪はない。（すなわち）「ない」と答えること、「与えよ」ということである。「与えよ」とは「施しをせよ」と、強く乞い求めてやってくる人の言葉である。「ない」というのは「（与えるものは）何もない」と、求められても拒む人の答えである[4)]。それらは悪の最たるものである。（すなわち）「与えよ」と言う者もそうだし、それにもまして、「ない」と答える者には、悪の結果が残る。したがって、この両方ともが悪である。

202.

śikṣayanti na yacchante dehīti kṛpaṇā narāḥ /
avastheyam adānasya mā bhūd evaṃ bhavān iti //[5)]
貧しい人々は「施しをせよ」と求めずとも教えて下さる。
施しをしない者はこの有様、貴殿はそうなってはならないと。

kuněṅ kapawitran ika[6)] saṅ manasi mara aminta dāna / ri denyar pawarawaraḥ / mapitutur / kumwa liṅ nira / haywa juga ṅwaṅ matěṅět / prihěn kagawayakěna tapwa ikaṅ dāna / wulatana kěta avasthā niṅ tan pawawe dāna ṅūni / ya ika mamaṅke kadi saṅhulun / yathānya tat mamaṅke ya / mataṅnyan gawayakěna ikaṅ dāna / maṅkana liṅ nira warawaraḥ / tatar panasi sirar maṅkana apitutur juga / mataṅnyan pawitra //
施しを求めてくる物乞いは実に清めを与えてくれる。というのは、彼らは次のことを教えし諭してくれるからである。いわく「決して吝嗇であってはならない。努めて布施をするように。以前に布施をしなかった者がどうなったか見ればよい。私のようになるのだ。このようになってはだめだ。だから施しをすべきなのだ。」彼らはこう教えてくれる。たとえ（実際に）物乞いをせずとも、そう諭してくれるのだ。

203.

pradadyād deyam ity eva yajed yaṣṭavyam ity api /
astu vātra phalaṃ mā ca kartavyaṃ puruṣeṇa hi //[7)]
施すべきだから施しなさい。供養すべきだから供養しなさい。
その果はあるかないかいずれか。人はなすべきことをなすのみ。

lawan waneh yadyapin hanā / tan hana kuněṅ ikaṅ phala / wehakěna ta pwa yathāsambhawa / sakāyakāya / ikaṅ yogya wehakěna / maṅkana wastu yogya pūjākěna / pūjākěna juga / niyata maphala pwaṅ dāna / ṅūniṅūni tikān gawayěn //
また他に（こう言われる）。果報があろうともなかろうとも、適切に、施すにふさわしいものの布施に努めなければならない。同様に、供養にふさわしいものをもって供養すべきである。布施の果は必ず実るだろう。なにはともあれ施しをしなさい。

204.

hiraṇyadānaṃ godānaṃ pṛthivīdānam ity api /
etāni vai pavitrāṇi tārayanti paratra ca //[8)]
黄金の寄進、牛の寄進、土地の寄進、

これらは実に清らかなるもので、来世へ運んでくれる。

kunaṅ ikaṅ kanakadāna / godāna / bhūmidāna / wěkas niṅ pawitra ika / pawitra ṅaran iṅ maṅhilaṅakěn kleśa / lawan maněkākěn riṅ swargaloka //
黄金の寄進、牛の寄進、土地の寄進、これらは清めの極みである。清めとは穢れを滅することである。また（それは施主を）天界に到達させるものである。

205.

suvarṇaṃ rajataṃ vastraṃ maṇimuktāvasūni ca /
sarvam etan mahārāja dadāsi vasuvān dhanam //[9)]
金も銀も、衣も、宝石も真珠も、はたまた土地も、
このすべてを、大王様、財宝に富む貴方様は寄進なさる。

nihan saṅkṣepa niṅ dānākěna / mās / pirak / dodot / maṇik / mutya[10)] / bhūmi / salwir niṅ wastu mūlya / yatika dānākěna //
寄進すべきものをまとめれば次のとおり。金、銀、布[11)]、宝石、真珠、土地。（すなわち）これら高価なものはすべて布施すべきものである。

206.

dadyāc chubhāṃ yaḥ kapilāṃ sacelāṃ kāṃsyopadohāṃ kanakāgraśṛṅgām /
tais tair guṇaiḥ kāmadughā hi bhūtvā naraṃ pradātāram upaiti sā gauḥ //[12)]
美しく、茶色で、装いをまとい、銅の乳缶を具え、角の先を黄金で飾った牛を寄進しなさい。その牛は、あれこれの徳により如意牛となって、寄進者のもとにやって来る。

kuněṅ yan lěmbu kapilā / lwir nikaṅ dānākěna / dodotana ta ya / bhūṣaṇani kanaka tuṅtuṅ niṅ suṅunya / saha kaṅśabhājana[13)] / wawan iṅ aměh / phalanya dlāha / kāmadughā dhenu / lěmbu mamětwakěna sakahyun / kadi bhaṭṭārī nandinī / dṛbya nika riṅ paraloka //
茶色の牛がいれば、次のように寄進すべきである。布を巻きなさい。角の尖端を金で飾りなさい。乳を搾り、銅の容器に入れて運びなさい。その結果たるや、後になって、乳のごとくに望みのものをだしてくれる牛、すなわち、あらゆる願いを成就する牛となる。聖なるナンディニー雌牛[14)]のごとくに。来世における財産となるものである。

207.

sughandhadhūpāny anulepāni vastrāṇi mālyāni ca mānavo yaḥ /
dadyād abhīkṣṇaṃ sa bhaved arogī tathā surūpaś ca sa devaloke //[15)]

芳しい香、白粉、衣、花環を定期的に寄進すべきである。
そうすれば天界で人は病にかからず、美しさを保つ。

yapwan asĕp sugandha / śarīralepana kuněṅ / aṅgarāga makādi jĕnu dodot / kĕmbaṅ inaṅit / lwir nikaṅ dāna / ika saṅ maweh dāna maṅkana / sira ta lituhayu / nirwyādhi sulakṣaṇa surūpa dlāha //
芳しい煙香、あるいは体に塗る軟膏、（すなわち）塗香などの化粧粉[16]、布地、花環。
これらの類の寄進をする人はすばらしい。来世では病なく、徳高く、見目麗しい。

208.

tilān dadata pānīyaṃ dīpān dadata mā vṛthā /
jñātibhiḥ saha modadhvam etat pretya sudurlabham //[17]
胡麻を与えよ、水を与えよ、灯火を与えよ、確実に。
まことに得難き所に赴き、親族と共に幸を得ることになる。

nihan ta lwir niṅ dāna tan ewĕh / lĕṅa wuṅkal / wwai / wṛtti / pañjut / phalanya / masukhasukhan lawan kadaṅwarga dlāha //
難しくない類の寄進は次のようなものである。胡麻油[18]、水、灯明[19]。その結果として、来世で親族らと楽しく過ごすことになる。

209.

durlabhaṃ salilaṃ tāta viśeṣeṇa paratra ca /
pānīyasya pradānena tṛptir bhavati śāsvatī //[20]
あの世では水はきわめて得難い、父よ。
水の布施は永遠の満足をもたらす。

lawan atyanta durlabha kĕta ikaṅ wwai ri pöna / hana pwa magawe saliladāna / niyata ika amaṅgih tṛpti / tan kewĕhan riṅ bañu dlāha //
また、水はあの世ではきわめて得難いものである。だから水の布施を行えば、確実に満足を得ることになる。（すなわち）あの世で水に困ることは決してない。

210.

ālokadātā cakṣuṣmān prabhāyukto bhaven naraḥ /
pradīpadaḥ svargaloke dīpamāleva rājate //[21]
灯明を与える人は目がよく見え光輝に包まれるだろう。
灯明を与える人は天界で光の環の如く輝く。

kunaṅ ika saṅ madānapuṇya suluh / rahayu mata nira dlāha / surūpa akiris alĕṅis / lumĕṅ teja nira / yapwan pañjut dānapuṇya nikaṅ wwaṅ / suteja surūpa abhrā halĕp dlāha //
さて、灯明を布施する人は、あの世でよく目が見える。見目麗しく、煌々と光り輝く。人が功徳として灯明を布施すれば、あの世で威光あふれ美しく輝きに満ちるだろう[22]。

211.

catraṃ hi bharataśreṣṭha yo dadāti dvijātaye /
sa śakraloke vasati pūjyamāno ’psarogaṇaiḥ //[23]
バラタの最上の者よ、バラモンに傘を布施する者は
天女の群れにかしづかれ、インドラの世界に住まう

kunĕṅ phala niṅ mapuṇya payuṅ riṅ saṅ brāhmaṇa / mantuk riṅ indraloka jĕmah / pinūjā kinatwaṅan de niṅ widyādhara-widyādharī //
さて、バラモンに傘を布施する功徳はといえば、来世でインドラの天界を得て、男女の妖精ら[24]に敬われ供養されることである。

212.

upānahau tu yo dadyāc chlakṣṇasnehasamanvitau /
so ’pi lokān avāpnoti daivatair abhipūjitaḥ //[25]
柔らかでしっとりした履物を布施する人は
天界に至り、神々のもてなしをうける

kunaṅ yan tarumpah / pāduka / puṇya nikaṅ wwaṅ / rahayu paripūrṇa nirwikāra ta ya winarṇa / mumurih riṅ swarga ika jĕmah / kinatwaṅan iṅ hyaṅ //
また、靴、履物を人が布施するとしてその功徳はといえば、美しく、完全無欠であるとされる。来世では天界に至り、神々にかしづかれる。

213.

sarvasvam api yo dadyāt kaluṣeṇāntarātmanā /
na tena svargam āpnoti cittam evātra kāraṇam //[26]
たとえ全財産を寄進しても、不純な心によるものであれば
それで天界を得ることはない。内心こそが要因である。

ndātan pramāṇa kweh / yadyapin sakwehan iṅ dṛbya nikaṅ wwaṅ / puṇyākĕnanya / ndān yan agĕlĕh buddhinya / kapalaṅ-alaṅ tan tulus tyāga / tan paphala ika / saṅkṣepanya / śraddhā niṅ

manah prasiddha kāraṇa niṅ phala //
多くのものといっても（寄進に）限りはない。（ただし）人が全財産を寄進しても、心が濁っていれば、それが障りとなって、（欲望の）捨離は完結しない。果が結ばないということである。要するに、善意[27]こそが（良い）結果の原因である。

214.

yad yad iṣṭatamaṃ loke yac ca syād dayitaṃ gṛhe /
tat tad guṇavate deyaṃ tad evākṣayam icchatā //[28]
世間で最も欲せられ、家庭で大事にされているもの
不滅を望む者は、徳高き人にそれらを与えるべきである。

kunaṅ deya / sāwakan iṅ wastu kinahyunan / salwira niṅ wastu kinatṛṣṇān kunĕṅ / yatika dānākĕna riṅ saṅ maguṇa / yan ahyun ṅwaṅ ri tan hĕntya ni kabhuktyanya dlāha //
何を与えるべきかといえば、望まれるものすべて、強く求められるものすべてである。それを高潔な人に与えるべきである。もし人が来世で享受するものが尽きないことを願うのであれば[29]。

215.

satkṛtya tu dvijātibhyo yad dīyate tad uttamam /
yācitena hi yad dattaṃ tad āhur madhyamaṃ budhāḥ //[30]
敬いをもってバラモンに寄進すればそれは最上の布施である。
乞われて寄進すれば、それは中位の布施と賢者は語る。

nya bheda niṅ dāna / yan inundaṅ inārambha saṅ brāhmaṇa / inupakāra pinūjā saha pādyādi maṅgala / wineh ta sira dāna / dāna maṅkana kramanya / ya iha uttamadāna ṅaranya / uttamaphala ika / yapwan pakahetu paminta ikaṅ dāna / madhyamadāna ṅaran ika / madhyamaphala ika dlāha //
布施の違いについてだが、バラモンに招かれて必要な準備をおこない、敬いの心をもって足洗の水などでおもてなしし、祝詞を捧げ、贈り物をする。このような次第でなされる寄進は最上の布施と言われる。それは最上の結果をもたらす。要求があっての布施は中位の布施と言われる。来世で結ばれる果も中位である。

216.

avajñayā dīyate yad yad devāśraddhayāpi ca /
tad āhur adhamaṃ dānaṃ munayaḥ satyavādinaḥ //[31]

侮蔑して、また、神への敬いなく寄進をすれば
それは最低の布施と、真実を語る聖者は語る。

yapwan awajñā sampe buddhi niṅ aweh dāna / tan śraddhā kunaṅ / tan abuṅah pituhu hana niṅ karmaphala / kaniṣṭhadāna / ṅaran ika / liṅ saṅ paṇḍita //
もし寄進者の心に侮蔑、すなわち賤しむようなことがあれば、また不信心であれば、その行為の結果がめでたくはないこと必定である。それは最低の布施と言われる、と賢者は述べる。

217.

aśraddhayā hutaṃ dattaṃ tapas taptaṃ kṛtaṃ ca yat /
asad ity ucyate pārtha na ca tat pretya neha ca //[32)]
信心なくなされたものは、火に焚べられた献供であれ、寄進であれ、苦行であれ、
不正であると言われる、アルジュナよ。それは来世でもこの世でも無意味である。

upalakṣaṇa tika / riṅ āhuti / weweh / tapa / salwir niṅ ulah dharma / yan tan padulur śraddhā niṅ manah / kaniṣṭha ṅaran ika / tan paphala riṅ ihatra paratara //
例えて言おう。火への献供にせよ、施物にせよ、苦行にせよ、いかなる徳高き行為であれ、信心が伴わなければ、最低であると言われる。この世でもあの世でも果を結ぶことはない。

218.

deyāni kaṇapiṇyākaśākāny api hi yācataḥ /
tad abhyāsocitatyāgo māṃsādy api hi dāsyati //[33)]
乞い求める人には穀粒でも油菓子でも野菜でも与えるべきである。
習慣により離欲を積み重ねれば、肉すらも与えるようになるだろう。

kunaṅ tĕkap nika saṅ mataki-taki dānakarma / alpawastu sakarĕṅ dānākĕna / kadyaṅga niṅ prāt / luṅgat / luṭik / buṅkil[34)] / samsam prakāra / tĕlas parityāga pwa irika / licin aṅlugas alaris ri kawehanya / makanimitta ṅ abhyāsa / dady ika mehakĕna rah dagiṅnya mĕne //
さて与える行為を習慣とする人について言えば、まずは少しのものを与えなさい。たとえば、安価な食事[35)]、油菓子、野菜など。やがて捨離（の境地）に至り、欲を離れ、すぐに与えるようになる。それが習慣となれば、やがて、（自らの）血や肉も与えるだろう。

219.

yo na dadyāt pratiśrutya svalpaṃ vā yadi vā bahu /
āśās tasya hatāḥ sarvāḥ klībasyeva hatā kriyāḥ //[36)]
多寡に関わらず、約束しておいて与えなければ、
その者の望みはすべて潰える。不能な男の行為が虚しく終わるように。

kunaṅ ikaṅ wwaṅ mapitutur juga / makon agawaya dānapuṇya / akweh akĕḍika tuwi / ikaṅ wwaṅ maṅkana kramanya / ya ika tan siddhasādhya dlāha / wiluma asiṅ seṣṭaprayojananya / kadi krama niṅ klīwa / tan paphala polahnya //
多かれ少なかれ、功徳ある布施をすべしと説く者が、次のようなことになったら、すなわち、その後で（自らが）なすべきことを果たさなかったとしたら、彼のすべての望みは潰える。性的不能者の運命のように、その行為が果を結ぶことはない。

220.

kariṣya iti saṃśrutya kartavyaṃ tad akurvataḥ /
mithyāvacanadagdhasya iṣṭaṃ pūrtaṃ vihanyate //[37)]
すると約束しながら、なすべきことをなさなければ
虚言で身を焦がし、儀式も徳行も無に帰す。

hana ta wwaṅ kumwa liṅnya / om / magawaya dharmasādhana ṅhulun / saliwira niṅ hinayu / maṅkana liṅnya / ndātan tuhu ya agawe / hilaṅ iṣṭanya / mwaṅ pūrtanya ika / nyaṅ iṣṭa ṅaranya //
このように言う人がいる。「私めが本務を果たす営みをしよう。功徳あるあらゆる類のことをしよう。」このように言いながら、実行しなければ、その者の儀式も徳行も滅びてしまう。ここで「儀式」と言う（のは次のとおりである）[38)]。

221.

ekāgnikarma havanaṃ tretāyāṃ yac ca hūyate /
antarvedyāṃ ca yad dānam iṣṭaṃ tad abhidhīyate //[39)]
一つの祭火への供犠、また、三火に捧げられるもの[40)]、
また、祭壇への供物、これが儀式と言われる。

pūjā ri saṅ hyaṅ ekāgni / pūjā ri saṅ hyaṅ tryagni / dāna riṅ puṇya kunaṅ / yatika iṣṭa ṅaranya / nyaṅ pūrta ṅaranya //
一つの祭火への供養、三つの祭火への供養、はたまた功徳のための布施。それが儀式と

呼ばれる。「徳行」と言うのは（次のとおりである）。

222.

vāpīkūpataṭākāni devatāyatanāni ca /
annapradānam ārāmaḥ pūrtam ity abhidhīyate //[41)]
池、井戸、水溜、神殿、
食事のお供え、庭園。これらが徳行と言われる。

puṇya talāga[42)] tan hili / puṇya sumur / puṇya talāga humili / puṇya dewagṛha / ulul / kamalir / pahoman prakāra / puṇya nasi / puṇya pawirāmān / patani gilaṅ-gilaṅ prakāra / ika ta kabeh / yatika pūrta ṅaranya //
流れをせき止めた貯水池、井戸、流水池[43)]、神殿、天蓋、御堂[44)]、護摩壇等々の寄進。米飯のお供え、お休み所、すなわち、寝殿などの寄進。これらすべてが、徳行と言われるものである。

223.

prāyeṇākṛtakṛtyatvān mṛtyor udvijate naraḥ /
kṛtakṛtyāḥ pratīkṣante mṛtyuṃ priyam ivātithim //
一般に、なすべきことをしていない人は死を恐れる。
なすべきことをした人々は愛しい客のごとく死を待ち望む。

ikaṅ wwaṅ tapwan kṛtakṛtya / tapwan paniddhākĕn caturwarga / atakut riṅ pāti prāyanya / kunaṅ ika saṅ kṛtakṛtya / tĕlas maniddhākĕn dharmasādhana / kalalah sira n herakĕn ikaṅ mṛtyu / kadi kalalah niṅ umantyakĕn tĕka niṅ iṣṭamitra //
務めを行わない人、すなわち人生の四目的[45)]を成就しない人は、死を、すなわちこの世からの旅立ちを恐れる[46)]。義務の履行を成し遂げたのち、人は死を待望するようになる。あたかも親友が来るのを待ち望むように。

224.

kathaṃ te tyaktasadvṛttāḥ sukhaṃ rātriṣu śerate /
maraṇāntaritā yeṣāṃ narakeṣūpapattayaḥ //[47)]
正しい行いを放棄した者たちがどうして夜の間安楽に眠られようか。
地獄への生起が死によって分けられるというのに。

ikaṅ wwaṅ pisaniṅun gawaya ṅ dharmasādhana pwa ya ta / mapa ta krama nikān enak turunya /

pāti mara hĕlat nikaṅ narakaloka n kabhuktya denya //
人が務めを果たすことをしなければ、どうして眠っているときに安楽であろうか。その人地獄を味わうかどうかの分かれ目が死であるのに[48]。

225.

yo dadyād aparikliṣṭam annam adhvani vartate /
śrāntāyādṛṣṭapūrvāya tasya puṇyaphalaṃ mahat //[49]
旅の道中にあって、会ったこともないが疲れている人に
喜んで食べ物を与える者には功徳の果が大きい。

kunaṅ ikaṅ wwaṅ maweh nasi / tan antuk niṅ kasakitan / riṅ hawan asuṅ-suṅ / aṅhel tan kawruhnya / agöṅ ikaṅ śubhakarmaphala katĕmu denya riṅ dlāha //
ある人がご飯を与える。道中で、知り合いでもないが疲れている人に、苦痛を感じることもなく。そのすばらしい行為の大きな果報を、来世で得ることになるだろう。

226.

kṛśāya hrīmate tāta vṛttikṣīṇāya sīdate /
apahanyāt kṣudhāṃ yas tu na tena puruṣaḥ samaḥ //[50]
やつれてなお慎み深く、生活に困窮し、哀れな方に
飢えを取り除いてあげれば、それに匹敵する人はいない。

yapwan maṅke krama nikaṅ wwaṅ / hana ya wwaṅ akuru daridra / göṅ iraṅ / tar wruh ri paṅananya / ya ta hinilaṅakĕnya lapānya / winehnya amaṅana / ikaṅ wwaṅ maṅkana / ya ika tan papaḍa n[51] hana riṅ rāt / maṅke dlāha tuwi //
人が次のようにするとする。やつれて惨めで、恥じらい強く食べ物もおぼつかないような人がいたとき、その人の飢えをなくしてあげる。ものを与えて食べられるようにする。そのようなことをする人に比類する人はこの世にもいないし、あの世でも同様である。

227.

pratyakṣaṃ prītijananaṃ bhoktṛdātror mahāphalam /
sarvāṇy anyāni dānāni parokṣaphalavanty uta //[52]
（食物を与えることは）食べる人と与える人に目に見えて喜びを生み、大きな果実をもたらす。それ以外のすべての施しは、目に見えない果報を持つものである。

apan ikaṅ annadāna / pratyakṣa ikān pagawae tṛpti / irika saṅ maweh lawan saṅ wineh / maṅke

tuwi katon pagawenya inak amběk //
さてこの食事を与えることだが、これは与える人と受け取る人に、目に見える形で喜びを与えるものである。今そこで心に安楽をもたらされるのが見てとれる。

228.

deyam ārtasya śaraṇam sthitaśrāntasya cāsanam /
tṛṣitasya ca pānīyaṃ kṣudhitasya ca bhojanam //[53)]
苦しむ者には庇護所を、立ち疲れた者には座席を
渇いた者には水を、飢えた者には食事を与えるべきである。

kunaṅ deya niṅ wwaṅ ri wwaṅ alara katěkan duhkha / śaraṇa ikaṅ dānākěna ya / yapwan riṅ wwaṅ kěli-kělik / mara araryan[54)] i kita / kalasa / palaṅka wehakěna / kunaṅ riṅ wwaṅ wělkaṅ / wwai dānākěna / muwah riṅ wwaṅ alapā / bhojana dānākěna //
苦しみ憐れな人に与えるべきものはといえば、庇護を与えなさい。疲れて、そなたの元に憩いに来た者には、寝床や椅子を与えなさい。喉が渇いた者には水を与えなさい。そして空腹な者には食べ物を与えなさい。

229.

cakṣur dadyān mano dadyād vācaṃ dadyāt subhāṣitām /
pratyutthānābhigamanaṃ kuryān nyāyena cārcanam //[55)]
眼差しをやるべし。心を配るべし。美しい言葉をかけるべし。
座を立って迎え、正しく敬うべし。

lawan waneh / wulat amanis / manah alěba abětiṅ / wuwus enak / sěgěh swāgata / yatika gawayakěna / dulura nikaṅ[56)] dāna / yathāyukti //
また他にこう言われる。 優しい眼差し、大らかで元気な気持ち、心地よい言葉、歓迎のおもてなし。これらを実践しなさい。布施とあわせて、適切なやりかたで。

230.

tṛṇāni bhūmir udakaṃ vāk caturthī ca sūnṛtā /
satām etāni geheṣu nocchidyante kathañcana //[57)]
草、土地、水、そして四つ目に優しい言葉。
よき人々の家ではこれらが不足することは決してない。

nihan taṅ tělu / tan wiluma kapaṅgiha riy umah saṅ sajjana / pratyekanya / samsam / paṅkti

patamuy / wwai hiděṅ / ujar amanis / satya hitāwasāna / yatika tan lupta katěmwa riy umah saṅ mahājana //
次の三つ[58]は、よき人の家には必ずあるものである。個々に挙げれば、食用の草、客殿[59]、浄水。（また）優しく誠実で幸福をもたらすような言葉。これらはすぐれた人の家には必ずある。

231.

yeṣāṃ nāgrabhujo devā na vṛddhātithibālakāḥ /
rākṣasān eva tān viddhi nirvaṣaṭkāramaṅgalān //[60]
最初に食事を摂るのが神々でもなく、年長者でもなく、客人でもなく、子供でもないような人々は、vaṣaṭ という発声[61]や祝祷を行わない羅刹だと知るがよい。

kunaṅ ikaṅ wwaṅ maṅke kramanya / tan dewa / tan wwaṅ matuha / tan tamuy / tan rare / ikaṅ rumuhun amaṅan riy umahnya / ikaṅ taṅ wwaṅ maṅkana / rākṣasa ṅaran ika / apat tar wruh ri saṅ hyaṅ waṣaṭkāra-mantra-maṅgala / apa tan paṅanākěnya / patular iṅ dewādi //
次のような人がいるとする。家で最初に食事を供するのが神様でも年寄りでも客人でも子供でもない。そのような人は羅刹と呼ばれる。なぜなら waṣaṭ という発声、真言、祝祷を知らないからである。神様らとの交流を行わないからである。

232.

ekaḥ svādu na bhuñjīta ekaḥ svārthān na cintayet /
eko na gacched adhvānaṃ naikaḥ supteṣu jāgryāt //[62]
一人で美味しいものを食べてはならない。一人で我が事を考えてはならない。
一人で旅してはならない。皆が眠るときに一人で目覚めていてはならない。

lawan tan dadi manuṅgalakěn wastu menaka / pathyarasa bhojana / mwaṅ tan dadi tumuṅgal i wiwekanya riṅ kinārya / winětwakěna[63] ta ya riṅ len / mwaṅ tan panuṅga-nuṅgala taṅ alaku-laku / lawan tan dadi sumělat mataṅhi yan paturu rowanta[64] kabeh //
また、よいもの、美味な食事を独占してはならない。また、なすべきことの判断を一人でしてはならない。ほかの人にも提示するべきである。また旅人は単独行であってはならない。また、仲間が皆眠っている間に起きて別行動などしてはならない。

233.

yeṣāṃ na pacate mātā na pacate pitā /
ucchiṣṭaṃ ye ’bhikāṃkṣanti teṣām etan mahāsukham //

母親も父親もその人のために料理を作らず、
残りものを待ち望む人[65]、その人たちには大いなる喜びがある。

hana ta wwaṅ maṅke kramanya / tan pasuruhan saṅ rāmareṇanya[66] / apayapan tan pamaṅanya / ya tan hinayapakĕnya ri saṅ rāmareṇa / salwir niṅ tinaḍahnya / niyata tunasan saṅ rāmareṇa tapwa pinaṅanya sāri-sāri / ikaṅ wwaṅ maṅkana kramanya / ya ika yathāsukha n panĕmwakĕn sukha asama-sama dlāha //
次のような人がいる。父親も母親もその人の養育を放棄。というのも食事を与えない。どんな食事も父母が供することはない。だから父親と母親の食事はその一番大事な部分が味わわれることがない。このような人は、将来、比類なき幸せを思う存分享受することになるだろう。

234.

durbalārthaṃ balaṃ yasya tyāgārthaṃ ca parigrahaḥ /
pākaś caivāpacitārthaṃ pitaras tena putriṇaḥ //
か弱き者のために力あり、喜捨のために財あり。
痩せ衰えた者のために食糧あり。そういう人により、子をもつ父親となるのである。

nihan sinaṅgah anak / ikaṅ śaraṇa niṅ anātha / tumuluṅ kadaṅ kalaran don iṅ śaktinya / dānākĕna donya antuknya aṅarjana / paṅanĕn iṅ daridra donya n pasuruhan / ikaṅ maṅkana / yatikânak ṅaranya //
子供と呼ばれるのは次のとおりである。寄る辺なき人を庇護する者、自らの力をもって親族や苦しむ人を助ける者、欲しいものを人に与える者、貧しい人に責任もって食を与える者。このような者は子供と呼ばれる。

235.

anu taṃ tāta jīvanti jñātayaḥ saha bāndhavaiḥ /
parjanyam iva bhūtāni drumaṃ svādum ivāṇḍajāḥ //[67]
父よ、知己や親族はそなたに頼って生きている。
大地が雨雲に、鳥たちが美味なる木に頼るように。

nyaṅ waneh ikaṅ wwaṅ pinarāśrayan i kadaṅnya / kadi lwir saṅ hyaṅ Indra / an pinakahuripan iṅ sarwabhāwa / mwaṅ kadi lwir niṅ kayu / an pinakahuripan iṅ manuk / maṅkana ta ya / an pinakahuripan iṅ kuṭumbanya / ikaṅ wwaṅ maṅkana yatikânak ṅaranya //
さて他に（こう説かれる）。親族らの寄る辺となる者、例えば生きとし生ける者が命の

頼みにするインドラのごとく、また鳥たちが頼る木のごとく、このように家庭において頼りとされるような人は、子供と言われる。

236.

śrīmantaṃ jñātim āsādya yaj jñātir avasīdati /
dagdhavṛkṣaṃ mṛga iva sādanaṃ tasya nindati //[68)]
富裕な知己に頼るもその知己が没落すると
獣が焼けた木を責めるがごとく、その知己の没落をなじる。

kuněṅ ikaṅ wwaṅ sugih / pinarāśrayan de niṅ kadaṅnya / ndān yaya juga kadaṅnya kepwan / kasakitan tar wruh ri paṅaněnya / kadi lwira niṅ kidaṅ amarāśraya riṅ kayu gěsěṅ katunwan / wibhawa nikaṅ wwaṅ maṅkana kramanya / kaśmala ika / tan yogya taṅgapěn / yadyan dānakěna //
さて富裕な人は親族に頼りにされるが、その人が不調となり、病んで食事もままならなくなるとする。あたかも鹿が頼りにしていた木に火がついて燃えたときのように、その人の富がそうなってしまうと、（本来）与えてもらうはずだったものも受け取るに値しない卑しいものとされる。

237.

catvāras te tāta gṛhe vasantu śriyābhibhūtasya gṛhasthadharme /
dīno jñātiś cāvasannaḥ kulīnaḥ sakhā daridro bhaginī cānapatyā //[69)]
家長の務めとして、財産に恵まれた人の家には、四種の人々を住まわせるべきである。哀れな親族、家柄良くも没落している者、貧窮する友、そして子供のいない妹。

mataṅnyan pāt tikaṅ tamolaha riy umah niṅ wwaṅ / lwirnya / kadaṅ kāsyasih / wwaṅ sujanma kahīnan / mitra daridra / ari wadwan kraṅan / nahan taṅ pāt / iwěnya maṅantya riy umah niṅ wwaṅ[70)] //
というのも、四種の人を家に住まわせるべきである。列挙すれば、哀れな親族、高貴な生まれだが落ちぶれている人、貧しい友、石女の妹。これら四種の人は家に住まわせるべきである。

238.

akarmaśīlaṃ ca mahāśanaṃ ca lokadviṣṭaṃ bahumāyaṃ nṛśaṃsam /
adeśakālajñam aniṣṭaveṣam etān gṛhe na prativāsayeta //[71)]
無職、大食い、嫌われ者、騙し屋、非道、時と場所をわきまえない者、服装が好ましく

ない者。これらを家に住まわせてはならない。

kunaṅ lwir niṅ tan yukti maṅantya riy umah / wwaṅ nirarthakâlĕmĕh / wwaṅ nirarthaka doyan[72] amaṅan / wwaṅ nindanīya[73] kinelikan iṅ wwaṅ akweh / wwaṅ prabañcana[74] / wwaṅ tan periṅ / tan harimbawā[75] / wwaṅ tan wriṅ kāladeśa / wwaṅ makaweśa tan yogya weśanya / nahan lwir niṅ tan uṅgwa riy umah //
さて、家に住まわせるふさわしくない人を挙げれば、やる気のない役立たず者、無駄に大食らいする者、批判を浴び、大衆に嫌われる者、人を欺く者、尊敬の念を持たない者、同情心のない者、時と場所をわきまえない者、ふさわしくない服装をする者。このような者は家におくべきでない。

239.

ṛtvikpurohitācāryāḥ śiṣyasambandhibāndhavāḥ /
sarve pūjyāś ca mānyāś ca śrutavṛttopasaṃhitāḥ //[76]
ヴェーダ祭官も王室祭官も師匠も、弟子も親類縁者も
優れた知識と行為が備わっていれば、皆、尊び敬うべきである。

kunaṅ lwir nyaṅ pratyeka niṅ prihĕn tan bari-barin / saṅ brāhmaṇa māji Ṛgweda / prohita / paṅajyan / śiṣya / kulabandhu / kadaṅ / wruh ta riṅ dharmaśāstra / mwaṅ śiṣṭācāra //
さて、次のような人はいずれも軽んじてはならない。リグウェーダに通暁するバラモン、王室祭官、師匠、弟子、親戚、縁者、法典を知る者、そして徳行者。

240.

upādhyāyaṃ pitaraṃ mātaraṃ ca ye ’bhidruhyanti manasā karmaṇā va /
teṣāṃ pāpaṃ bhrūṇahatyā viṣiṣṭaṃ nānyas tasmāt pāpakṛc cāsti loke //[77]
師や父や母を、心あるいは行為をもって害する者、
彼らの罪は胎児殺しよりも重い。この世でこれよりひどい悪者は他にいない。

hana pwa drohaka riṅ paṅajyan / riṅ bapêbu kunaṅ / makakāraṇa ṅ kāya / wāk / manah / ikaṅ maṅkana kramanya / agöṅ pāpa nika / lwih sakêṅ pāpa niṅ bhrūṇahā / bhrūṇahā ṅaran iṅ rurū garbha[78] / saṅkṣepanya atyanta pāpa nika //
体や言葉や心で[79]師や父母を傷つける者がいる。このような行為は大罪であり、胎児殺しよりもひどい。胎児殺しとは、子宮から剥がし落とすことである。要するにこれは極悪な行為である。

241.

śarīram etau kurutaḥ pitā mātā ca bhārata /
ācāryaśāstā yā jātiḥ sā divyā sājarāmarā //[80)]
バラタの子よ、父親と母親の二人が身体を作る。
師により導かれる誕生こそ、聖なるものにして、不老不死である。

nihan tattwa niṅ bapêbu / upādhyāya / bapêbu saṅka niṅ śarīra / ndātan laṅgĕṅ ika / kunĕṅ ikiṅ jāti / makādi ṅ kabrāhmaṇan / saṅskāra iṅ upādhyāya / saṅkanyan hana / ikanaṅ prasiddha tinūt winarawarah iṅ upādhyāya / ya tika uttama / ika tan kĕna riṅ lara pāti //
父母、（及び）師についての真理とはこうである。父母が体の源であるが、永続するものではない。しかし、バラモンとなることを始めとする誕生[81)]は、師により完成される。そこを根源とする。まさに師の教えを受け続けて確立するものである。したがって、最上のものであり、苦痛にも死にも屈することはない。

242.

laukikaṃ vaidikaṃ vāpi tathādhyātmikam eva ca /
yasmāc cādhīyate naras taṃ pūrvam abhivādayet //[82)]
世間のことであれ、ヴェーダのことであれ、アートマンのことであれ、
教えていただく方を最初に表敬すべきである。

waneh saṅ umarahakĕn saṅ hyaṅ laukikawidyā / mwaṅ waidikawidyā / lawan ādhyātmikawidyā[83)] / paṅajyan irika wih / sira ta rumuhun sĕmbahĕn //
ほかに（こう言われる。）世俗の知識、聖典の知識、精神に関する知識を教える方、こうした先生にこそ、まず最初に敬礼を捧げるべきである。

243.

guruṇā vairanirbandho na kartavyaḥ kadācana /
anumānyaḥ prasādyaś ca guruḥ kruddho vijānatā //[84)]
決して師と敵対してはならない。
師が怒ろうとも、わきまえて、敬い宥めるべきである。

nya ṅ dāya / haywa juga ṅwaṅ sumahur awahil-wahilan lawan guru / maṅkana yar abutĕṅ / anumānan sira / asih-asihĕn / petĕn ikaṅ sānukana ri manah sira //
なすべきことは次の通り。先生に異論を唱えてはならない。たとえ先生が怒っていると

しても、心を推し量り、愛情をもって接すべきである。先生の心に思いの丈を尽くすようにすべきである。

244.

samyaṅ mithyāpravṛtte vā vartitavyaṃ gurāv iha /
gurunindā nihanty āyur manuṣyāṇāṃ na saṃśayaḥ //[85)]
たとえ誤った行いをしていようとも、師にはしかるべく従うべきである。
師を非難することはひとの命を滅ぼすこと必定である。

lawan waneh / haywa juga ṅwaṅ maṅupět[86)] riṅ guru / yadyapin salah kěna[87)] polah nira / kayatnākěna juga gurūpacaraṇa / kasiddhan iṅ kasewan iṅ[88)] kadi sira / bwat amuharâlpāyuṣa amaṅun kapāpan / kanindān[89)] iṅ kadi sira //
また他に（こう言われる）。先生を誹謗してはならない。たとえ先生が間違ったことをしてもだ。努めて先生にお仕えするようにしなければならない。そのような方にしっかりと敬意を尽くすのだ。そのような方を誹謗すれば、短命、薄幸となる。

245.

tapaḥśaucavatā nityaṃ dharmasatyaratena ca /
mātāpitror aharahaḥ pūjanaṃ kāryam añjasā //[90)]
常に苦行と清めをおこない、正義と誠実さを専らとして、
日々、父母の供養をひたむきに行うべきである。

ikaṅ wwaṅ gumawayakěn kapūjān iṅ rāmareṇa sāri-sāri / laṅgěṅ magawe tapa ṅaran ika / mwaṅ laṅgěṅ maśoca / apagěh riṅ kasatyan mwaṅ dharma[91)] ṅaran ika //
ひとは日々たゆまず父母の供養をすべきである。苦行といわれることを常におこない、常に体を清め、誠実さと正義と言われることに揺らぐことなく。

246.

mātā gurutarā bhūmeḥ khāt tathoccataraḥ pitā /
manaḥ śīghrataraṃ vāyoś cintā bahutarā tṛṇāt //[92)]
母は大地より重く、父は空より高い。
心は風より速く、思いは草より多い。

apan lwih těměn bwat niṅ ibu / saṅkêṅ bwat niṅ lěmah / katwaṅana / tar baribarin kaliṅanya / aruhur těměn saṅ bapa saṅke laṅit / adrěs těměn aṅ manah saṅkêṅ bāyu / akweh těměn aṅěn-aṅěn

saṅkêṅ dukut //
というのも、母親の重さは実に大地の重さより大きい。（だから）敬え、軽んじるな、と言われるのである。父親は実に空よりも高い。心は風よりも速い。考えることは草よりも数多である。

247.

pitā mātā ca rājendra tuṣyato yasya dehinaḥ /
iha pretya ca tasyātha kīrtir bhavati śāsvatī //[93)]
父母がその人に満足しているならば、
現世でも来世でもその人の名声は永遠である。

ikaṅ bhakti makawwitan / parituṣṭa saṅ rawwitnya denya / phalanya maṅke dlaha / laṅgĕṅ pālĕman ika riṅ hayu //
父母に尽くすことに関して言えば、その人により両親が満足していれば、その果はこの世にも来世にも生じる。善行の名声は永遠である。

248.

śarīrakṛt prāṇadātā yasya cānnāni bhuñjate /
krameṇaite trayo ’py uktāḥ pitaro dharmasādhane //[94)]
身体をつくり、命を与え、その食事をいただく。
伝統的にこの三種が、本務を遂行するうえでの父だと言われる。

tĕlu[95)] pratyeka niṅ bapa / tiṅkanya / śarīrakṛt / prāṇadātā / annadātā / śarīrakṛt ṅaran iṅ saṅka niṅ śarīra / prāṇadātā ṅaran iṅ papuṇya hurip / annadātā ṅaran iṅ maweh amaṅan aṅiṅwini wih //
三種の父親を一つ一つ挙げれば、身体の創造者、生命を与える者、食事を提供する者である。身体の創造者とは、身体の源ということである。生命を与える者とは、命という恵みを与えるということである。食事を提供する者とは、食事を与え大事に育てるということである。

249.

prītimātraṃ pituḥ putraḥ sarvaṃ putrasya vai pitā /
śarīrādīni deyāni pitā tv ekaḥ prayacchati //[96)]
父親にとって息子は喜びでしかない。息子にとっては父親はすべてである。
父親のみが、身体など与えるべきものを与える。

ikaṅ anak ṅaranya / mātra trĕpti niṅ bapa ginawenya / kunaṅ ikaṅ bapa / sakweh niṅ sukha niṅ anak ginawenya / apan tan hana tinĕṅĕt niṅ bapa / śarīra nira towi / winehakĕn ira ta ya //
息子というのは、父親に喜びのみを与えるものである。他方、父親は、息子にあらゆる幸福を与える。なぜなら、父親は阻まれることなく身体さえも与えるからである。

250.

samartham asamarthaṃ vā kṛśaṃ cāpy akṛśaṃ tathā /
rakṣaty eva sutaṃ mātā nānyaḥ poṣṭā tathāvidhaḥ //[97)]
能力があろうとなかろうと、痩せていようと太っていようと、
母親は息子を守る。同じように育てる人は他にはいない。

maṅkana ibu / aratā jugâsih nira mānak ya / apan wĕnaṅ tan wĕnaṅ / suguṇa / nirguṇa / daridra / sugih / ikaṅ anak / kapwa rinakṣa nira / iniṅū nira[98)] ika / tan hana tapwa kadi sira / riṅ māsiha maṅiṅwana //
母親とはこうである。息子には等しく愛情を注ぐ。息子の出来が良くても悪くても、人柄が良くても悪くても、貧しくても豊かでも、母親は守り、大事に育てる。母親とおなじように愛し育てる人は他にない。

注

* 以下で用いる略称
IS: *Indische Sprüche* (Böhtlingk 1966)
Manu: Manusmṛti (Mandik 1992; 電子テキスト)
Mbh: *Mahābhārata* (Sukhtankar and Belvalkar 1933–66; 電子テキスト)
MSS: *Mahāsubhāṣitasaṃgraha* (Sternbach 1974–2007; 電子テキスト)
OJED: *Old Javanese-English Dictionary* (Zoetmulder 1982)

なお、参照偈の下線は、本テキストと異なっている読みを示すために付してある。

1）安藤 2018; 2019; 2020; 2021; 2022。
2）Cf. Mbh 5.113.9:
nātaḥ paraṃ <u>vainateya</u> kiṃcit pāpiṣṭham <u>ucyate</u> /
yathāśānāśanaṃ loke <u>dehi nāstī</u>ti vā <u>vacaḥ</u> //
dehi と nāsti が本テキストの同じ語順の異読が複数のデーヴァナーガリー写本に見られる。
3）Raghu Vira の校訂では、バリ文字・デーヴァナーガリー文字の両テキストとも marā minta としているが、mara (> para) + aminta (> pinta) からなると解釈するのが自然だろう。
4）古ジャワ語はサンスクリット偈を的確に解釈、補足説明しており、Mbh 校訂本が示す dehi nāsti という語順が本来的だと推測される。
5）ほとんど一致する偈が、Mbh ではなく *Garuḍapurāṇa* に見つかる（1.109.25）：

śikṣayanti ca yācante dehīti kṛpaṇā janāḥ /
avastheyam adānasya mā bhūd evaṃ bhavān api //

類例が *Skandapurāṇa* 1.2.2.66:

bodhayaṃti ca yāvanto dehīti kṛpaṇaṃ janāḥ /
avastheyam adānasya mā bhūd evaṃ bhavān api //

IS 第4489偈も含意は同じである：

bodhayanti na yācante bhikṣāhārā gṛhe gṛhe /
yācakasya pradātavyam adattaphalam īdṛṣam //

6）校訂テキストの kapawitra nika という区切りを修正。OJED 参照（s.v. pawitra, p. 1329: kapawitran “purifying power, purity, holiness”）。

7）Cf. Mbh 3.32.2cd–3.32.3ab:

nāhaṃ dharmaphalānveṣī rājaputri carāmy uta /
dadāmi deyam ity eva yaje yaṣṭavyam ity uta //
astu vātra phalaṃ mā vā kartavyaṃ puruṣeṇa yat /
gṛhān āvasatā kṛṣṇe yathāśakti karomi tat //

8）Cf. Mbh 13.58.5:

hiraṇyadānaṃ godānaṃ pṛthivīdānam eva ca /
etāni vai pavitrāṇi tārayanty api duskrtam //

9）Cf. Mbh 13.61.20:

suvarṇaṃ rajataṃ vastraṃ maṇimuktāvasūni ca /
sarvam etan mahāprājña dadāti vasudhām dadat //

10）Gonda（1973, p. 324）は、古ジャワ語 mutya はタミル語系統の muttu ないし mutta に由来すると示唆しており、OJED の記載（p. 1164）にもそれが反映されている。

11）サンスクリットの vastra は広義の布・衣類を意味するが、古ジャワ語 dodot は OJED（p. 411）によれば “garment worn around the lower part of the body” と、特定の用途の布を指すようである。

12）Cf. Mbh 13.57.28:

prayacchate yaḥ kapilāṃ sacailām kāṃsyopadohāṃ kanakāgraśṛṅgīm /
tais tair guṇaiḥ kāmadughāsya bhūtvā naraṃ pradātāram upaiti sā gauḥ //

13）校訂本は kāṅsabhājana とするが、OJED は kāṅsa, kaṅsa ではなくて kaṅśa を登録し、この箇所を用例として挙げている。これに従い、綴りを修正する。

14）OJED には登録されていない。Mbh では、願ったものを生み出してくれる如意牛 Surabhi の子で Vasiṣṭha 仙のもとにおり、母牛と同じく如意牛だとされる。

15）Raghu Vira は言及していないが、Mbh 13.57.38がこの偈とほぼ一致する：

sragdhūpagandhāny anulepanāni snānāni mālyāni ca mānavo yaḥ /
dadyād dvijebhyaḥ sa bhaved arogas tathābhirūpaś ca narendraloke //

16）ここでは、香木や香油など、煙や油分の揮発で香るものと、塗香のように、練り物状で体に塗る香の二種の香に言及している。古ジャワ語解説では、後者について、偈の anulepana をまずサンスクリット語由来の śarīralepana と受け、さらにサンスクリット語で aṅgarāga と言い換え、それを現地語系の jěnu という表現で的確に補っている。

17）Cf. Mbh 13.99.20:

tilān dadata pānīyaṃ dīpān dadata jāgrata /
jñātibhiḥ saha modadhvam etat pretesu durlabham //

d の pretesu の箇所を本偈のように pretya su- と読む Mbh の写本が、複数のデーヴァナーガリー写本などに見られる。

18）OJED（p. 2330）は lĕńa を「胡麻ないしは胡麻油」とする一方、lĕńa wuńkal を「特定の油、胡麻油？」と疑問符付きで解釈を提示している。wuńkal は単独では「凝固した」という意味のようである。

19）wṛtti はサンスクリット語の varti からの派生。これ自体 “lamp” という意味がある。直後に同義語 pañjut が当てられており、サンスクリット由来語から現地語系への言い換えと解釈できる。

20）Cf. Mbh 13.99.19:

durlabhaṃ salilaṃ tāta viśeṣeṇa paratra vai /
pānīyasya pradānena prītir bhavati śāśvatī //

21）Cf. Mbh 13.101.49–50:

ālokadānāc cakṣuṣmān prabhāyukto bhaven naraḥ /
tān dattvā nopahiṃseta na haren nopanāśayet //
dīpahartā bhaved andhas tamogatir asuprabhaḥ /
dīpapradaḥ svargaloke dīpamālī virājate //

49前半と50後半が本偈と相応する。なお *Brahmapurāṇa* 29.4の前半が、本偈後半にほぼ等しい：

dīpadātā svargaloke dīpamāleva rājate /
yaḥ samālabhate nityaṃ kuńkumāgurucandanaiḥ //

22）「輝く」という意味合いの同義語が 3 つ列挙されており、便宜的に訳し分けておく。

23）Cf. Mbh 13.98.18–19:

chatraṃ hi bharataśreṣṭha yaḥ pradadyād dvijātaye /
śubhraṃ śataśalākaṃ vai sa pretya sukham edhate //
sa śakraloke vasati pūjyamāno dvijātibhih /
apsarobhiś ca satataṃ devaiś ca bharatarṣabha //

18前半と19前半が本偈と相応する。

24）サンスクリットの apsarogaṇa を widyādhara-widyādharī と言い換えているのが注目される。apsara がインドラに侍るという表現は古ジャワ文献にも見られる（*Bhomakāwya* 15.13: himpĕr hyaṅ Indra sira de niṅ apsara kabeh sumewa ri sira）。しかしながら、本テキストの古ジャワ解説ではあえて別の半神格の名称を持ち出してきている。確かにサンスクリットの *Mahābhārata* には、インドラ神が天車に乗り、vidhyādhara や apsaras らの群れを従えるという記述もあり（1.51.9）、そうした伝承をふまえての注釈かとも想像される。

25）偈の前半は Mbh 13.99.20前半に対する南方写本の異読とほぼ一致する：

upānahau ca yo dadyāc ślakṣṇau snehasamanvitau /

そして後半は、Mbh 13.99.21前半に等しい：

so ’pi lokān avāpnoti daivatair abhipūjitān /

26）Raghu Vira は言及していないが、*Pāśupatasūtra* の注釈書 *Pañcārthabhāṣya* に含まれる偈（1.99.26）が最もこれに近い：

sarvasvam api yo dadyāt kaluṣeṇāntarātmanā /
na tena dharmabhāg bhavati bhāva evātra kāraṇam //

Pañcārthabhāṣya 中の偈は、本テキスト第88偈、第111偈と相応することが判明しており（安藤 2020; 2021）、他の古ジャワ語文献でも、例えば *Bhīṣmaparwa* に含まれていることがわ

かっている（安藤 2002）。

27）この文脈では、サンスクリット原義の「信心」、つまり OJED が第一に挙げる意味よりも、第二の “favor, goodwill” で解釈するのが適切かと思われる。

28）Cf. Mbh 13.58.7:

yad yad iṣṭatamaṃ loke yac cāsya dayitaṃ gṛhe /
tat tad guṇavate deyaṃ tad evākṣayam icchatā //

なお、*Viṣṇusmṛti* 92.32 も上記と同一である。

29）サンスクリット偈で akṣayam √iś と短く表現するところを、現地語系の語彙を用いて補い解説している。

30）Cf. Mbh 12.282.17–18:

satkṛtya tu dvijātibhyo yo dadāti narādhipa /
yādṛśaṃ tādṛśaṃ nityam aśnāti phalam ūrjitam //
abhigamya dattaṃ tuṣṭyā yad dhanyam āhur abhiṣṭutam /
yācitena tu yad dattaṃ tad āhur madhyamaṃ budhāḥ //

17前半と18後半が本偈と相応する。

31）Cf. Mbh 12.282.19:

avajñayā dīyate yat tathaivāśraddhayāpi ca /
tad āhur adhamaṃ dānaṃ munayaḥ satyavādinaḥ //

32）Cf. Mbh 6.39.28:

aśraddhayā hutaṃ dattaṃ tapas taptaṃ kṛtaṃ ca yat /
asad ity ucyate pārtha na ca tat pretya no iha //

33）ほかのサンスクリット文献に類例は見当たらない。校訂テキストの ghāṇa という読みを kaṇa に修正。本偈は、乞食者には食べられるものならば惜しみなく与えるべしと説いている。ghāṇa は Monier-Williams、Apte いずれの辞典にも登録されていないが、Kauṭilya の *Arthaśāstra* (2.15.52) に piṇyāka と並べて言及される箇所がある：

viśeṣo ghāṇapiṇyākatulā /
kaṇakuṇḍakaṃ daśāḍhakaṃ vā //

ここでは牡牛の特別な飼料に言及しており、上村訳（1984, p. 162）では ghāṇapiṇyāka を「油の搾り滓」としている。他方、kaṇa は穀粒を指す。kaṇa と piṇyāka を食べることに関しては、Manu 11.92 に次の記述がある：

kaṇān vā bhakṣayed abdaṃ piṇyākaṃ vā sakṛn niśi /
surāpānāpanuttyarthaṃ vālavāsā jaṭī dhvajī //

これはスラー酒を飲んだ罪の除去のために、穀粒ないしは油菓子を夜に一度だけ食べよと述べており、食材としての kaṇa と piṇyāka を並べて表現する典型的な一例と見られる。Raghu Vira の校訂注によれば、いくつかの写本には、kana ないし kāna と読むものもある。これらを総合的に判断して、kaṇa という読みの方を支持したい。

34）校訂テキストの buṅkila を修正。

35）prāt、luṅgat、luṭik については、Raghu Vira は意味が取れなかったためか疑問符をつけており、OJED でさえ、本テキストの文脈から “a particular kind of cheap food” とするにとどまる。

36）Cf. Mbh 13.9.3:

yo na dadyāt pratiśrutya svalpaṃ vā yadi vā bahu /
āśās tasya hatāḥ sarvāḥ klībasyeva prajāphalam //

37）Cf. Mbh 5.105.8:

pratiśrutya karisyeti kartavyaṃ tad akurvataḥ /
mithyāvacanadagdhasya iṣṭāpūrtaṃ praṇaśyati //

38）OJED では iṣṭa は “wish, desire” とするのみだが、第220–222偈の文脈では、iṣṭa と pūrta を並列して言及したのち、それぞれについて説明を加えており、√yaj からの派生としての iṣṭa を指すことは明らかである。なお、古ジャワ解説の末尾で、次の偈に関わることに言及するのは珍しい。

39）MSS 7605 は本偈と完全に一致する。

40）一つの火は家庭祭、三つの火はシュラウタ祭で灯される gārhapatya-、dakṣiṇa-、āhavanīya- の聖なる火のこと。三祭火の構成と重要性については、Manu 2.31 が言及している：

pitā vai gārhapatyo ’gnir mātāgnir dakṣiṇaḥ smṛtaḥ /
gurur āhavanīyas tu sāgnitretā garīyasī //

ガールハパティヤ祭火を父、ダクシナ祭火を母、アーハヴァニーヤ祭火を師とし、その三つ組みが非常に重要だと述べている。Knipe 1972 参照。

41）ほとんど一致する偈が *Brahmasūtra* 1.1.4 への Govindananda の注釈、*Ratnaprabhāvyākhyā* に見つかる：

vāpīkūpaṭaḍākādi devatāyatanāni ca /
annapradānam ārāmaḥ pūrtam ity abhidhīyate //

ほかにも、*Sāṃkhyakārikā* 44 に対する Śaṃkara の注釈 *Jayamaṅgalā* の中で、iṣṭa と pūrta の説明に次の 2 偈を引用している：

agnihotraṃ tapaḥ satyaṃ devānāṃ paripālanam /
atithirvaiśvadevaṃ ca iṣṭam ity abhidhīyate //
puṣkariṇyaḥ sabhā vāpyo devatāyatanāni ca /
annapradānam ārāmaḥ pūrtam ity abhidhīyate //

ここでは、iṣṭa に関しては本テキスト第221偈と定義は異なる一方、pūrta の定義は第222偈と近似する。いずれにしても、第220偈で iṣṭa・pūrta に言及したのを受けて、Mbh にはないにもかかわらず、それぞれの定義に相当するサンスクリットの偈を、この金言集に組み込んだのは興味深い。

42）OJED は talaga として登録するが、サンスクリットの taṭāka ないし taḍāka に由来することは明らかなので、2 つめの母音を校訂テキストのとおり長音のままにしておく。

43）古ジャワ解説では、（貯水）池（talāga）に水流の有無（tan hili / humili）を補って、サンスクリット偈の vāpī と taṭāka を訳し分けている。

44）kamalir は OJED でも「（宗教に関わる）建物」とはっきりしない。

45）caturwarga について、本テキスト第 7 偈の注（安藤 2018, p. 79, 注29）参照。

46）OJED は prāya について “departure from life” とのみ提示しており、それに従って訳しておくが、サンスクリットでは具格で「一般に」という意味でしばしば用いられる。古ジャワ解説者が prāyanya を pāti（死）の言い換えで用いているのか、あるいはサンスクリット偈と同義で副詞的に用いているのか、いずれかだろう。

47）Raghu Vira は言及していないが、MSS 8446 が本偈と完全に一致する。

48）Raghu Vira は antarita を “barred” と解釈しており、「善行をおこなえば死しても地獄に落ちることは止められるのに」という理解かと思われる。他方、古ジャワの hĕlat（= hĕlĕt）は「間にあるもの、分別するもの」という意味である（OJED, p. 613）。要するに、antar-√i を字義通りに理解するか、広義にとらえるかという解釈の問題である。

49）Mbh 13.7.7 は本偈と完全に一致する。Mbh 13.62.14 も d 以外はほぼ等しい：

yo dadyād aparikliṣṭam annam adhvani vartate /
śrāntāyādṛṣṭapūrvāya sa mahad dharmam āpunuyāt //

50）Mbh 13.58.11 は本偈と完全に一致する。

51）文脈から、校訂テキストの tan papaḍan を修正。ただし、OJED の引用例（s.v. paḍa, p. 1223）では、papaḍan という読みの可能性も残している。

52）Cf. Mbh 13.62.29:

pratyakṣaṃ prītijananaṃ bhoktṛdātror bhavaty uta /
sarvāṇy anyāni dānāni parokṣaphalavanty uta //

この偈がほぼ一致することについて Raghu Vira は言及していない。

53）Cf. Mbh 3.2.53:

deyam ārtasya śayanam sthitaśrāntasya cāsanam /
tṛṣitasya ca pānīyaṃ kṣudhitasya ca bhojanam //

54）OJED の登録（p. 1514, s.v. raryan）に準じ、校訂テキストの arāryan の長音を短音に修正。

55）Cf. Mbh. 3.2.54:

cakṣur dadyān mano dadyād vācaṃ dadyāc ca sūnṛtām /
pratyudgamyābhigamanaṃ kuryān nyāyena cārcanam //

Mbh 13.7.6 も前半のみ上記の偈と一致する。

56）校訂テキストの duluran ikaṅ を、文脈から修正。OJED の引用例（p. 430, s.v. dulur）参照。

57）Cf. Mbh 3.2.52 (= Mbh 5.36.32):

tṛṇāni bhūmir udakaṃ vāk caturthī ca sūnṛtā
satām etāni geheṣu nocchidyante kadācana //

Manu 3.101 も c の語順が変わる程度（etāny api satāṃ gehe）で上記の偈に等しい。

58）サンスクリット偈では先に三つを列挙して、さらに四つ目という表現をとっているが、古ジャワ解説では、最初から三つと示している。ここでは偈に即して四項目を取り上げていると解釈し、意味が通るように補って訳しておく。

59）OJED では paṅkti = panti とするものの、panti の項でも panti=paṅkti と堂々巡りで、意味を明示しないままになっている（pp. 1256; 1261）。ここでは patamuy（賓客用のもの）という形容、及び panti のもう一つの意味 (“pavillion”) からの類推で仮に訳しておく。

60）Cf. Mbh 13.101.55:

yeṣāṃ nāgrabhujo viprā devatātithibālakāḥ /
rākṣasān eva tān viddhi nirvaṣaṭkāramaṅgalān //

viprā を devā とする異読は南方版の多くに見られるが、devatā にかえて vṛddha とする異読は Mbh 校訂版が扱う写本にはない。

61）供犠でホートリ祭官が vaṣaṭ と発するのを受けて、アドヴァリュ祭官が祭火に献供をするという。例えば *Bhāradvāja Śrautasūtra* 8.19参照。

62）Cf. Mbh 5.33.45:

ekaḥ svādu na bhuñjīta ekaś cārthān na cintayet /
eko na gacched adhvānaṃ naikaḥ supteṣu jāgryāt //

Pañcatantara 5.95、MSS 7444 はこれと同一である。

63）校訂テキストでは hintwakna としているが、Raghu Vira 自身 “√hintu?” と疑問符付きの注記を残しており、OJED にも hintu (intu) は登録されていない。そこで文脈もふまえて、読みの修正の可能性を示しておく。winětwakĕn は wĕtu を基語とし、“to bring force, produce, show”（受動態）を意味する（OJED, p. 2248）。

64）rowaṅ に二人称接尾辞がついた形と解釈するが、OJED の引用例（s.v. sĕlat, p. 1731）では rowaṅnya と読んでいる。

65）サンスクリット偈の真意は、ucchiṣṭa から類推すれば、神々に捧げた食事を適時に下げ、それをほかの人々と会食することの価値を述べているのであろうか。

66）OJED は rena で登録している（p. 1546）が、本校訂テキストでは一貫して reṇa としている。

67）Cf. Mbh 12.76.36:

anu tvā tāta jīvantu suhṛdaḥ sādhubhiḥ saha /
parjanyam iva bhūtāni svādudrumam ivāṇḍajāḥ //

68）Cf. Mbh 5.39.25:

śrīmantaṃ jñātim āsādya yo jñātir avasīdati /
digdhahastam mṛga iva sa enas tasya vindati //

69）Cf. Mbh 5.33.59:

catvāri te tāta gṛhe vasantu śriyābhijustasya gṛhasthadharme /
vrddho jñātiṛ avasannaḥ kulīnaḥ sakhā daridro bhaginī cānapatyā //

南方系のマラヤラム写本のいくつかに本偈のように catvāras 及び abhibhūtasya と読むものがあるが、c の冒頭を dīno とする異読は見つからない。

70）校訂テキストの niṅwaṅ を、解説冒頭の一文の用例にならって修正。

71）Cf. Mbh 5.37.31:

akarmaśīlaṃ ca mahāśanaṃ ca lokadviṣṭaṃ bahumāyaṃ nṛśaṃsam /
adeśakālajñam aniṣṭaveṣam etān gṛhe na prativāsayīta //

本テキストのように prativāsayeta とする異読例も各系統写本に少なくない。なお MSS 27 は上記 Mbh 偈と同一である。

72）校訂テキストの nirarthakādoyan を修正。

73）校訂テキストの nindāni ya を修正。OJED の引用例（s.v. nindanīya, p. 1187）参照。

74）校訂テキストの prawañcana を修正。OJED の引用例（s.v. parbañcana, p. 1293）参照。

75）Raghu Vira は校訂テキストで harimbawā に疑問符を付け、意味が不明であると示しているようだが、この語は OJED に登録されており（p. 595, “considerate, compassionate, sympathetic, altruistic”）、本テキストから複数の用例を引いている（第47偈ほか）。

76）Cf. Mbh 13.37.6:

ṛtvikpurohitācāryāḥ śiṣyāḥ saṃbandhibāndhavāḥ /
sarve pūjyāś ca mānyāś ca śrutavṛttopasaṃhitāḥ //

ベンガルおよびデーヴァナーガリー写本のいくつかに、本偈のように śiṣya を複合語で表記する異読が見られる。なお、MSS 7376 は上記 Mbh 偈と同一である。

77）Cf. Mbh 12.109.26:

upādhyāyaṃ pitaraṃ mātaraṃ ca ye ’bhidruhyanti manasā karmaṇā vā /
teṣāṃ pāpaṃ bhrūṇahatyā viśiṣṭaṃ tasmān nānyah pāpakṛd asti loke //

MSS 7157 はこれと同一である。

78）校訂テキストの rurugarbha を修正。

79）サンスクリット偈では心（manas）と行為（karman）とを挙げているのに対し、古ジャワ語のほうでは、かえって古典インド本来の、いわゆる「身口意の三業」で説明しているのが興味深い。

80）Cf. Mbh 5.44.5:

śarīram etau kurutaḥ pitā mātā ca bhārata /

ācāryaśāstā yā jātiḥ sā satyā sājarāmarā //

satyā のところを本偈のように divyā とする異読がデーヴァナーガリー写本に複数ある。Mbh 13.108.18 は kurutaḥ を sṛjataḥ とする以外は上記の Mbh 偈と一致する。なお、Manu 2.147–148 は両親からの誕生と師による誕生とを次のように説く：

kāmān mātā pitā cainaṃ yad utpādayato mithaḥ /
saṃbhūtiṃ tasya tāṃ vidyād yad yonāv abhijāyate //
ācāryas tv asya yāṃ jātiṃ vidhivad vedapāragaḥ
utpādayati sāvitryā sā satyā sājarāmarā //

明らかにこの 2 偈の主旨が、本偈や Mbh の偈に反映されている。

81）前の注で密接な連関を示した Manu 2.147–148 の前後で、バラモン階級の者への入門式で授けられる第二の誕生を意味する brahmajanma に言及している（「バラモン階級の者にとってブラフマジャンマが永遠である」<Manu 2.146>;「ブラフマジャンマをもたらす者（= 師）」<Manu 2.150>）。サンスクリット偈では ācāryaśāsta- という形容のみで表現されている誕生に関して、古ジャワ解説者が kabrāhmaṇan という用語で的確に補足していることが注目される。

82）Raghu Vira は言及していないが、Manu 2.117 が c 以外ほぼ一致する：

laukikaṃ vaidikaṃ vāpi tathādhyātmikam eva vā /
ādadīta yato jñānaṃ taṃ pūrvam abhivādayet //

Padmapurāṇa 3.51.27 は、c のみ avāpya prayato jñānaṃ と異なるが他は上記の偈と一致する。また *Viṣṇusmṛti* 30.43.1 は、d のみ na taṃ druhyet kadācana と異なる。

83）校訂テキストの adhyātmika widyā を、OJED の登録と引用例（p. 22）に準じて修正。前の 2 つの widyā も、校訂テキストでは分かち書きされているが、サンスクリット由来語の複合語の通例にしたがって、ハイフンなしでつなげる。

84）Cf. Mbh 13.107.46:

guruṇā vairanirbandho na kartavyaḥ kadācana /
anumānyaḥ prasādyaś ca guruḥ kruddho yudhisthira //

85）Cf. Mbh 13.107.47:

samyaṅ mithyāpravṛtte ’pi vartitavyaṃ gurāv iha /
gurunindā dahaty āyur manuṣyāṇāṃ na saṃśayaḥ //

86）校訂テキストの maṅupat では意味がとれない。偈からの類推で読みを修正。OJED の引用例（s.v. upět, p. 2139）参照。

87）校訂テキストの salahkna を正しく区切ることで意味が通る。

88）校訂テキストの kasiddha niṅ kasewa niṅ という区切り方を修正。

89）本テキスト第116偈に対する古ジャワ解説での用例（kanindān saṅ hyaṅ weda; kanindān iṅ dewatā）（安藤 2021, p. 185）に準じ、校訂テキストの kanindā niṅ という区切り方を修正。

90）Cf. Mbh 12.127.9:

tapaḥśaucavatā nityaṃ satyadharmaratena ca /
mātāpitror aharahaḥ pūjanaṃ kāryam añjasā //

ここでは dharma と satya の並列順が異なるが、本偈と同一の読みをする異読は校注の写本には見当たらない。

91）古ジャワ語解説における satya と dharma の語順からすると、サンスクリット偈は本来 dharmasatyaratena という Mbh の読みと同一だったとも推測できる。

92）Cf. Mbh 3.297.41:

mātā gurutarā bhūmeḥ pitā uccataraś ca khāt /
manaḥ śīghrataraṃ vāyoś cintā bahutarī nṛṇām //

本偈のように nṛṇāṃ でなく tṛṇāt とする写本は少なくないが、ほかの箇所の異読で本偈と一致するものは見当たらない。

93）Cf. Mbh 3.196.19:

tayor āśāṃ tu saphalāṃ yaḥ karoti sa dharmavit /
pitā mātā ca rājendra tuṣyato yasya nityadā /
iha pretya ca tasyātha kīrtir dharmaś ca śāśvatah //

c–f が本偈に相応する。

94）Cf. Mbh 1.66.13:

śarīrakṛt prāṇadātā yasya cānnāni bhuñjate /
krameṇa te trayo ’py uktāḥ pitaro dharmaniścaye //

多くの南方写本は本偈と同じく dharmasādhane と読む。

95）校訂テキストの tĕluh を修正。

96）Mbh 12.258.17 は本偈と同一である。

97）Cf. Mbh 12.258.27:

samarthaṃ vāsamarthaṃ vā kṛśaṃ vāpy akṛśaṃ tathā /
rakṣaty eva sutaṃ mātā nānyaḥ poṣṭā vidhānatah //

多くの南方写本は本偈と同じく tathāvidhaḥ と読む。

98）校訂テキストの iniṅunira を修正。

参照文献

Apte, V. S.

1998 *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, Delhi (reprint).

Böhtlingk, Otto

1966 *Indische Sprüche*, 3 vols., Osnabrück (reprint).

Ganguli, K. M. (tr.)

2002 *The Mahabharata of Krishna-Dwipayana Vyasa*, 3 vols., New Delhi (reprint).

Gonda, J.

1936 *Het Oudjavaansche Bhīṣmaparwa*, Bandoeng.

1973 *Sanskrit in Indonesia*, Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures, Volume 99, New Delhi (2nd ed.).

Isvarakrsna

1970 *Sāṃkhyakārikā of Śrīmad Īśvarakṛṣṇa, with the Māṭhalavṛtti of Māṭharācārya and the Jayamaṅgalā of Śrī Śaṅkara*, Chowkhamba Sanskrit Series 296, Varanasi.

Johnson, F.

2017 *Hitopadeśa, the Sanskrit Text, with a grammatical analysis, Alphabetically Arranged*, London (reprint).

Kangle, R. P. (ed.)

1969 The Kauṭilīya Arthaśāstra, Part I: a critical edition with a glossary, Bombay (2nd ed.)

Kashikar, C. G.

1964 *Sūtras of Bharadvāja, critically edited and translated*, Part I: Text, Pune.

Knipe, D. M.
1972 One Fire, Three Fires, Five Fires: Vedic symbols in transition, *History of Religions*, 12–1, pp. 28–41.
Krishnamacharya, V. (ed.)
1964 *Viṣṇusmṛti, with the commentary Keśavavaijayantī of Nandpaṇḍita*, Chennai.
Mandik, V. N. (ed.)
1992 *Mānava-Dharma Śāstra*, 3 vols., New Delhi (reprint).
Monier-Williams, M.
1982 *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford (reprint).
Olivelle, P.
2005 *Manu's Code of Law: a critical edition and translation of the Mānava-Dharmaśāstra*, Oxford.
Raghu Vira
1962 *Sāra-samuccaya, a classical Indonesian compendium of high ideals*, Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures, Volume 24, New Delhi.
Sastri, R. A. (ed.)
1940 *Pasupata Sutras with Pancarthabhashya of Kaundinya*, Trivandrum.
Sternbach, Ludwik
1974–2007 *Mahā-subhāṣita-saṃgraha: being an extensive collection of wise sayings in Sanskrit*, vols. 1–8, Hosiapur.
Sukhtankar, V. S. and S. K. Belvalkar (eds.)
1933–66 *The Mahābhārata, for the first time critically edited*, 19 vols., Poona.
Teeuw, A. and S. Robson (eds. and trs.)
2005 *Het Bhomāntaka: the death of Bhoma*, Leiden.
Tripathi, S. (ed.)
2008 *Pañcatantram*, Varanasi.
Vyasa
1895 *Brahmapurāṇam*, Anandashram Sankrit Series 28, Pune (PDF).
1998 *Garuḍapurāṇam*, Varanasi (reprint).
2007 *Padmapurāṇam*, Chowkhamba Sanskrit Series 124, 6 vols., Varanasi (reprint).
2014 *Skandamahāpurāṇam,* Chowkhamba Sanskrit Series 156, 7 vols., Varanasi (reprint).
Zoetmulder, P. J.
1982 *Old Javanese-English Dictionary*, 2 vols., 's-Gravenhage.
安藤　充
2018 古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(1)『人間文化』（愛知学院大学人間文化研究所紀要）第33號，pp. 117–137.
2019 古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(2)『人間文化』（愛知学院大学人間文化研究所紀要）第34號，pp. 141–167.
2020 古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(3)『人間文化』（愛知学院大学人間文化研究所紀要）第35號，pp. 159–183.
2021 古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(4)『人間文化』（愛知学院大学人間文化研究所紀要）第36號，pp. 141–167.
2022 古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(5)『人間文化』（愛知学院大学人間文化研究所紀要）第37號，pp. 100–500.

上村　勝彦（訳）
1984 『カウティリヤ実利論』（上）・（下），岩波文庫.
渡瀬　信之（訳）
1991 『マヌ法典』中公文庫.

【電子情報】

Brahmapurāṇa
http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpustei/transformations/html/sa_brahmapurANa-1–246.htm
Brahmasūtra with Govindānanda's Ratnaprabhāvyākhyā
http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpustei/transformations/html/sa_bAdarAyaNa-brahmasUtra-subcomm.htm
Garuḍapurāṇa
https://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpustei/transformations/html/sa_garuDapurANa.htm
Mahābhārata
http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil.html#MBh
Mahāsubhāṣitasaṃgraha, verses 1–9979
https://people.math.osu.edu/rao.3/utf/msubhs_u.htm
Manusmṛti
https://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpustei/transformations/html/sa_manusmRti.htm
Pañcatantra
http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/1_sanskr/5_poetry/4_narr/vispancu.htm
Viṣṇusmṛt
https://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpustei/transformations/html/sa_viSNusmRti.htm